

銀色のシャープペンシル

文*木下 一 絵*浦上和久

教室の机も並べ終えたし、後は後ろにたまったごみをかたづけただけだ。そのとき、ぼくは綿ぼこりや紙くずに混じって、銀色のシャープペンシルが落ちていたのを見つけた。手に取ってほこりをはらってみると、まだ新しいし、芯も何本か入っているようだ。自分のシャープをなくしたところだったので、ちょうどいいやと思ってポケットにしまった。

一週間ほどたった理科の時間。今日はグループに分かれて融点の測定を行う。グループには幼なじみの健二と、このクラスになって仲良くなった卓也がいる。健二は調子がよくてときどき腹の立つこともあるが、ぼくと同じバスケット部で、いつも冗談ばかり言っている愉快なやつだ。その点、卓也は優しく、ぼくが困るといつも助けてくれる。対照的な二人だがなぜか気が合って、グループを作るといつも三人がいっしょになる。

理科室に行くと、教科委員が実験器具を配っていた。ぼくは卓也が読みあげていく温度計の値を記録していく係だ。席に着くと記録用紙が配られ、ぼくは準備しようと筆入れからあの銀色のシャープペンシルを取り出した。そのときだ。卓也がぼそつと、

「あれ、そのシャープ、ぼくのはや……。」

と言った。(えっ、これ卓也の?)と言おうとしたら、すかさず健二が、

「お前、卓也のシャープとったのか。」

と、大きな声ではやし立てた。ぼくは「とった」という言葉に一瞬血の気が引いていくのを感じた。ざわざわしていた教室が静まり返り、みんなが一斉にぼくの方を見た。ぼくはあわてて、

「何を言っているんだ。これは前に自分で買ったんだぞ。健二、変なこと言うなよ。」

と言って、健二をにらんだ。健二はにやにやしているばかりだ。卓也の方を見ると、ぼくの口調におどろいたのか、下を向いてだまってしまった。しばらくは教室全体にいやな空気が流れた。

チャイムが鳴り、先生が入ってこれられ、実験が始まった。ぼくは下を向いたまま卓也の読みあげる値を記録していった。卓也がぼくの右手ににぎられているシャープペンシルを見ているようで落



ち着かなかつた。早く授業が終わらないかと横目でちらちら時計を見た。でも、時間がぼくの周りだけ、わざとゆっくり流れているように感じた。本当のことを話そうと思つた。でも、自分で買ったなんて言つてしまつた手前、とても声には出せなかつた。

健二は相変わらずふざけて、班の女子を笑わせている。人の気も知らない健二に無性に腹が立つてきた。だいたい健二が悪いんだ。「とつた。」なんて大きな声で言うから返せなくなつたんだ。みんなだつて人の物を勝手に使つていくせに、こういうときだけ自分は関係ないなんて顔をしている。拾つただけのぼくがどうして泥棒のように言われなくちゃならないんだ。それに、卓也も卓也だ。みんなの前で言わなくてもよかつたんだ。大切な物ならきちんとしまつておけばいい。シャープペンシルの一本ぐらいでいつまでもこたわつていゝなんて心がせまいんだよ。

「実験をやめて、黒板を見なさい。」
先生の声が出た。右手はじんわりあせをかいていた。ぼくはシャープペンシルをポケットにさつとしまつと、みんなに分からないようにあせをズボンでぬぐつた。授業が終わると、ぼくは二人の前を素通りし、一人で教室にもどつた。だれともしゃべる気にはなれなかつた。

授業後、健二が部活動に行こうとさそつてきたが、ぼくは新聞委員の仕事があるからと、一人で教室に残つた。だれもいなくなつたのを確認すると、シャープを卓也のロッカーにつっこんだ。これでいい、ちゃんと返したんだから文句はないだろうと、部活動へ急いだ。

夕食を済ませるとすぐに部屋にかけ上がった。勉強をする気にもなれず、ベッドにあおむけになり、今日のことを考えていた。

「卓也君から電話。」

母が階段の下からぼくを呼んだ。とつさに卓也が文句を言うために電話してきたのだという考えがうかんだ。ぼくは何を聞かれても知らないで通そうと、身構えて受話器を取つた。

「今日のことだけど、実はシャープ、ぼくのかんちがいだつたんだ。部活動の練習が終わつて教室に忘れ物を取りにもどつたら、ロッカーの木工具の下にシャープがあつて。それに、本当のこと言

うと、少し君のこと疑つていたんだ。ごめん。」

卓也は元気のない声で謝つている。ぼくの心臓はどきどき音を立てて鳴りだした。

「う、うん。」

と言うと、ぼくはすぐに電話を切つた。まさか卓也が謝つてくるとは考えもしなかつた。自分の顔が真っ赤になつていゝのを感じた。だれにも顔を見られたくなくて、だまつて家を出た。

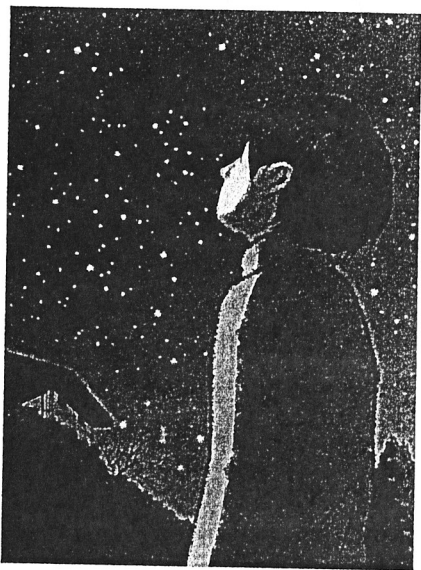
外に出ると、ほつた顔に夜の冷たい空気が痛いほどだった。ぼくは行く当てもなく歩きだした。

卓也はぼくのことを信じているのに、ぼくは卓也を裏切つている。このままで本当にいいのかと自分を責める気持ちが強くなりかける。すると、もう一人の自分が、(卓也がかんちがいだと言つていゝんだから、このままだまつていれればいいさ。)とささやいてくる。ぼくの心はゆれ動いていた。

突然、「ずるいぞ。」という声が聞こえた。ぼくはどきつ

として後ろをふり返つたがだれもない。この言葉は前にも聞いたことがある。合唱コンクールのとぎのことだ。ぼくはテノールのパートリーダーだったが、みんなも練習しなくなさそうだったし、用事があるからと言つては早く帰つて友達と遊んでいた。テノールはあまり練習ができませんまコンクールの日をむかえてしまつた。結果はやはり学年の最下位。ぼくはパートのみんながしつかり歌つてくれなかつたからだと言ふらした。帰り道、指揮者の章雄あきおといつしよになつた。ぼくは章雄にも「みんながやつてくれなくて。」と言つたら、章雄は一言、「おまえ、ずるいぞ。」と言ひ残して、走つていった。





あのときは、章雄だって塾があるからと帰ったことがあったのに、人に文句を言うなんて自分のほうがずるいんだと腹を立てていた。今度もそうだ。自分の悪さをたなに上げ、人に文句を言ってきた。いつもそうして自分を正当化し続けてきたんだ。自分のずるさをごまかして。

どれくらい時間がたっただろう。ふと顔を上げると、東の空にオリオン座が見えた。あの光は数百年前に星を出発し、今、地球に届いているという。いつもは何も感じないのに、今日はその光がまぶしいくらいかがやき、何かとてつもなく大きいもののように思える。少しずつ目を上げていった。頭上には満天の星がかがやいていた。全ての星が自分に向かって光を発しているように感じる。ぼくは思い切り深呼吸をした。そして、ゆっくり向きを変えると、卓也の家に向かって歩きだした。

15

10

5

「これは前に自分で買ったんだぞ。」と言ったときの「ぼく」は、どのような気持ちだっただろう。心の弱さを取りこえるためには、どのようなことが必要だろう。